

平成25年度

共学部 特別選抜コース

第1回 午後 入学試験問題

国語

(50分)

注 意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「（ ）」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

【一】 次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、相手をあざむこうと画策する。
- 2、厳重な包囲網を突破する。
- 3、今の話には合点がいらない。
- 4、お上の裁きを受ける。
- 5、近頃の不況で賃賃料が下がる。
- 6、彼の技は、もはや神のリョウイキだ。
- 7、無理難題をおしつけられて、ヘイコウした。
- 8、絶対王政の君主としてクンリンする。
- 9、カタキ役を演じて絶賛された名脇役。
- 10、夜になって人通りがぱったりタえる。

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

火曜日、清水さんはやっぱり来なかった。

大熊さんはあいかわらず、ぼくの授業に茶々を入れた。

女子グループはおしゃべりをやめなかった。

神田さんはミートソーススパゲッティをおかわりした。

ぼくは、帰りの会合のときに、^①宿題を出すことにした。

「このごろ、みんなはとも落ちつきがありません。先生はもう、怒るのにつかれました。」

ぼくが、まだいくらかかすれた声で話しはじめると、^②こどもたちはみんなぼくを見た。おどろいた。

できるじゃないか。^③みんなをふりむかせる言葉。みんなの気持ちをひとつにする言葉。ぼくにだつて。

「そこで、みんなに、むずかしい宿題を出すことにしました。」

えーっという声。でも、こんなにみんなの声がそろったのは久しぶりだ。神田さんさえ、口を大きく開けている。

「その宿題は、家族に抱きしめられてくること、です。」

もっと大きな、えーっという声。でも、顔はわらっている。顔を見合せて、わらいだしたこどもたちもいる。

「なにそれー」

「先生エッチー」

「変態じゃん」

「絶対無理」

口々に文句を言うが、顔はわらっている。なかでも大熊さんは立ちあがって不平を述べている。でもその顔はわらっている。ぼくはかまわずにもう一度言った。

「はい、今日の宿題は、家族に抱きしめられてくること。だれでもいいです。おとうさんでもおかあさんでもおばあちゃんでもおにいちちゃんでも。妹にでもいいです。」

「猫にでもいい？」

大熊さんがまぜかえす。

「猫とか犬はだめです。人間の家族だけです。家族のだれかに、ぎゅっと抱きしめてもらってきてください。明日、宿題ができたかどうか、ききますから、忘れないようにしてください。」

まだおさまらないざわめきの中、日直があいさつをした。

ぼくは神田さんを見た。神田さんだけは、わらっていないかった。

あくる朝、朝の会でぼくは右手を上げながら、きいた。

「はい、宿題をやってきたひとー」

こどもたちは顔を見合わせあい、照れくさそうにわらいながら、Aと手を上げた。でも全員じゃない。

「あれ？ 大熊さんは宿題、しなかったの？」

「しないよ。そんな宿題。」

大熊さんは机に肘をついて言った。その顔が赤い。

「そうか、残念だなあ。大熊さんのおかあさんに後で電話しておくよ。宿題を手伝うように。」

大熊さんはぱつと起きあがった。

「したよ！ 宿題しました。」

「ほんとに？」

大熊さんの顔は真っ赤になった。

「大熊さん、顔赤ーい。」

「ママにだっこしてもらったのー？」

まわりの男子が口々に言う。

「おまえらだってしてもらったんだろっ」

大熊さんににらまれて、こどもたちはそっぽをむいた。その顔も赤い。

ぼくは大熊さんの母親の顔を思い出した。長い金髪をひつつめて、いつも **B** と急いでいる。余分な肉の全くない、とがった横顔。大熊さんの他にこどもが三人いて、父親はいない。宿題だからしかたなく、抱きしめてくれたんだろけど、抱きしめ、抱きしめられたとたんに、^④ ながながかわったはず。しかたなく抱きしめてくれるわけじゃないことに、気づいたはず。大熊さんも、あらためて抱きしめられたことはなくても、母親に見守られながら育ってきたことを、思い出したはず。

はずかしがって手を上げなかったほかの男の子も、その頬の色を見れば、にやにやわらいを見れば、**C** 瞭然^{りょうぜん}だった。二組のこどもたちはみんな、宿題をやってきていた。

授業がはじまっても、女子グループはおしゃべりをはじめなかった。友達が悪口を言う気になれなくなったのだらう。自分が親から愛されているように、悪口を言われる子だって、親から愛されている。

大熊さんも、すっかりおとなしくなってしまうた。手のかかる弟三人の面倒を見させられるだけの自分ではないことに気づいたのかもしれない。自分ばかり我慢しているわけじゃない。いろんな我慢は、母親のためにしていると誇りを持ってほしい。

そんな ^⑤ ハグの効力も四時間目になるころには薄れてきて、大熊さんが授業に茶々を入れてきた。でも、ぼくはかまわなかった。にくたらしい大熊さんにも、抱きしめてくれる家族がいる。ひそひそ話をはじめた女の子たちにも、ひとりひとりに、かけがえのない娘と思って抱きしめてくれる家族がいる。そう思えば、こどもたちがかわいく思えた。

こんな気持でこどもたちにむかいあつたのは、はじめてだった。今までぼくに足りなかったところに、やつとぼくは気づいた。

もちろん、大熊さんのいたずらや女子のおしゃべりがなくなったわけじゃない。ぼくの力不足はかわらない。

ただ、ぼくははじめて気づいた。

こどもは、ひとりひとり違う。ひとりひとりが違う家に育ち、違う家族に見守られている。そして、学校にやってきて、同じ教室で一緒に学ぶ。一枚のTシャツだって、一本の鉛筆だって、この子のためにだれかが用意してくれた。そのひとたちの思いが、この子たちひとりひとりにつまっている。

そのだれかは、昨日はこの子たちにごはんを食べさせ、風呂に入れ、ふとんで寝かせ、今朝は朝ごはんを食べさせ、髪をくくったりなでつけたりして、ランドセルをしよわせ、学校に送りだしてくれたのだ。

そんなあたりまえのことに、ぼくはやつと気づいた。

ぼくは、この思いにこたえられるんだろうか。

^⑥ 目の前の三十八人のこどもたちが、輝いて見えた。だれかの愛情につつまれた、かけがえのないこどもたち。

でも、ひとりだけ、ずっとうつむいたままで、なにもかわらなかったこどもがいた。

神田さんだった。

^⑦ 神田さんは、給食のひじきごはんをおかわりして食べた。みんながあまりすきではない献立なので、気兼ねなくおかわりできる。

神田さんだけ、宿題ができていなかった。

放課後、神田さんは、いつものように校庭にやってきて、三組のこどもたちと一緒に野球をしていた。

秋の日暮れは早い。一日一日早くなっていく。四時半にもなると、こどもたちはみんな帰ってしまった。もうボールが見えなかった。

ぼくは職員室から目を凝らした。

うさぎ小屋の前の砂場に、神田さんがいた。白っぽいトレーナーが、校庭のすみにうかびあがっている。土曜日からずっと着ているトレーナー。

ぼくは神田さんのところに歩いていった。おどかさないように、ゆつくりと。

神田さんはうさぎ小屋の前に立って、うさぎをみつめていた。

「うさぎ、元気？」

ぼくが声をかけると、神田さんはびくつとした。

「なんだ。」

「なんだと思った？ おぼけ？ もう暗いもんな。」

かろうじて、神田さんの表情がうかがえる。

「宿題、むずかしかった？」

ぼくはきいてみた。神田さんはうなずいた。

「ママ、昨日帰ってこなかったし、朝は寝てたし。」

おとうさんは？ 出そうになった言葉をのみくだした。神田さんがその名を出さないことが答えた。

「そうか。それじゃあできないよな。」

ぼくは大きくうなずいた。

大丈夫。神田さんのせいじゃないよ。

それをわかってほしかった。

神田さんは、わるい子じゃないよ。

クラスの中でも小さいほうの神田さん。いつから切ってもらってないのか、髪の毛がおかっぱに近くなっている。まつげも長いし、目はくりくりしているから、はじめて見たときは女の子かと思った。

神田さんは、わるい子じゃないんだよ。

ぼくは神田さんの薄い肩に手をのばした。

そのとたん、神田さんがぱっと腕をふりあげて、大きくとびすさった。ぼくは驚いて、のばしかけていた手をひっこめた。

「ごめん。びっくりさせた？」

ぼくは言いながら、神田さんが反射的に大人の腕をこわがったことに気づいた。とっさに自分の体をかばおうとしていた。

やっぱり、神田さんはたたかれている。家で、あの男か、ぼくがまだ見たこともない母親に。

神田さんはぼくから一步離れた場所で、うさぎを見下ろした。

「神田さん。」

ぼくは言った。これだけは、伝えなくてはいけない。

「神田さんは、わるい子じゃないよ。」

神田さんは小さく首をふった。

「先生は知ってる。」

ぼくは一步だけ近づいて、くりかえした。

「神田さんは、わるい子じゃないよ。」

神田さんが信じてくれるなら、ぼくは百回でも言っておけるのに。

「神田さんは、なんにもわるいことしてないよ。」

でも、ぼくが言ったんじゃないかということ、ぼくは知っている。ぼくじゃなくて。

「神田さんは、いい子だよ。」

いつもみんなのしていることを見ている神田さん。校庭のすみで、友達が来るのを待っている神田さん。みんなの言うことをよくきいて、みんなのやりたいことをやって、みんなが楽しそうにしているのが好きな神田さん。大熊さんたちがけんかをしたとき、一緒に痛そうな顔をしていた神田さん。

「神田さんは、いい子だよ。」

ぼくはもう一度言った。

「先生は、知ってるよ。」

⑧ 神田さんの長いまつげから、大きな涙がぼたりと落ちた。糸を引くように、ゆつくりと、地面に落ちた。黄色く色づいた葉が散っている。桜の木の葉だ。木が貧弱だからか、葉っぱも小さい。

神田さんの肩が震えていた。

ぼくが、抱きしめていいんだろうか。

本当は、ぼくではないだれかがすべきこと。神田さんが本当に望んでいるのは、ぼくではない、だれか。でも。

そのだれから、どんなに望んでも、与えられないとしたら。

ぼくはそうと手をのばした。

神田さんがおびえないように。

⑨ ぼくは神田さんを抱きしめた。

(中脇 初枝「きみはいい子」サンタさんの来ない家」より)

問 一、——線①「宿題」とありますが、この「宿題」にはどのような意図がありますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、自分勝手な方向に暴走している子どもたちを親にいさめてもらおうとする意図。
- イ、自分が誰かの愛情に包まれたかけがえのない存在であることを意識させる意図。
- ウ、自分自身が子どもたちの対応に手一杯なため、簡単な課題で済ませようとする意図。
- エ、自分を日頃こまらせる子どもたちに逆にひとあわふかせようとする意図。

問 二、——線②「子どもたちはみんなぼくを見た」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、いつもの切り出し方と違っていたから。
- イ、いつもと違っておどした様子に見えたから。
- ウ、いつものかすれた声で聞きとりづらかったから。
- エ、いつもと違って投げやりな様子に見えたから。

問 三、——線③「みんなをふりむかせる」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、みんなを圧倒する
- イ、みんなに前を向かせる
- ウ、みんなを感動させる
- エ、みんなを注目させる

問 四、

A

・

B

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、のろのろ
- イ、ばらばら
- ウ、せかせか
- エ、はきはき
- オ、ばらばら

問 五、——線④「なにかがかわったはず」とありますが、どのように変わったのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、子どもと親との距離がせばまることにより、お互いの良い部分が見えてきて仲良くなった。
- イ、宿題という形で、強制的に親が子どもを抱きしめることにより、お互いに距離が生まれた。
- ウ、子どもと親が久しぶりにコミュニケーションを取ることで、親子の会話がはずんだ。
- エ、子どもと親がお互いの愛情を確認することにより、かたくなな心がとけ、穏やかさが生まれた。

問 六、

C

にあてはまる言葉を二字で答えなさい。

問 七、——線⑤「ハグの効力」とありますが、具体的にはクラスでどのようなことが起きたのですか。文章中から一文の形で二か所探し、最初の五字をそれぞれ抜き出して答えなさい。

問 八、——線⑥「輝いて見えた」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、ある程度の経験と自信はあるが、さらに子どもたち一人一人に向き合っていこうという意欲に燃えた気持ち。
- イ、ある程度の経験はあるが、可能性を秘めた子どもたちの個性を伸ばしていつてあげられるか多少不安が残る気持ち。
- ウ、自分に足りない部分はあるが、これからは子どもたち一人一人を自分なりにしっかりみていこうという謙虚な気持ち。
- エ、自分に足りない部分がありすぎて、子どもたちがかえってまぶしく遠い存在に思えてしまう後ろ向きな気持ち。

問 九、——線⑦「神田さんだけ、宿題ができていなかった」とありますが、それはなぜですか。その理由として適当なものを「神田さん」の言葉の中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。（カギカッコは必要ありません）

問 十、——線⑧「神田さんの長いまつげから、大きな涙がぼたりと落ちた」とありますが、このときの「神田さん」の気持ちの動きとして適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、自分の存在を認めてくれることばは、やはり親から聞きたかったと心の底で悲しさを覚える気持ち。
イ、自分がそれほど気にしていないことを指摘されたような気がして、逆にむなしさがつのった気持ち。
ウ、自分の心の隅にたまった様々な思いが、一気にあふれ出して、抑えることができない気持ち。
エ、自分にも、存在価値を認めてくれる大人がいたことに、うれしさを覚える気持ち。

問十一、——線⑨「ぼくは神田さんを抱きしめた」とありますが、それはなぜですか。その理由を、文章中の言葉を使って四十字以内で答えなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①『坊っちゃん』という作品は日本の悪童物語のひとつの典型です。そして、この典型はいまにいたるまであまり破られていない、つまりいまでも通用する悪童の典型物語だといえることができます。A、去年か今年出た村上龍の『長崎オランダ村』という作品があります。それは漱石の『坊っちゃん』的な感性以上のものは何もないといっているのです。逆にいうと、『坊っちゃん』の悪童性がいかに典型として象徴的なものかということを示しています。

とても大枠でいうと、『坊っちゃん』の悪童性は一度だけ破られたことがあります。第二次世界大戦が終わったとき、つまり敗戦になったときには新宿にも戦災浮浪児がいたし、上野の地下道や公園にもたくさんたむろして悪いことをしたりしていました。その戦災孤児というか、戦災悪童が唯一漱石が書いた『坊っちゃん』と違うタイプを現実的にあらわしていたとおもいます。近代文学でいうと、第一次戦後派の初期の作品が、それまでの日本の文学にまったくなかった言葉を使って表現し、つかの間のうちにその言葉は消えて日本文学特有の言葉に返ったという歴史があります。それとおなじで、悪童ということ自体も、戦災孤児が唯一漱石の典型を破って別のものを出したのです。

②しかし、それも社会秩序が整うと同時に消えてしまい、『坊っちゃん』の悪童性はやはり日本の近代以降の悪童性の典型だといえるかたちになって、潜在的にはちがう徴候もあるでしょうが、いまも通用しているのです。それは一口にいうと、慈母といましようか、盲目的ではあるけれども一生懸命子供をかわいがる母親に育てられた悪童性です。だからとても悪いことはするのですが、どこかに一種の正義感とか、正直さ、

率直さがあって、さっぱりしている悪童という印象をあてるのが大きな特徴です。悪いことだけをとり、この悪童は世界通有性だということになります。しかし、悪いことばかりしていても、どこか反抗心のなかにも一種の正直さがあるとか、正義の味方みたいな倫理観がある、それが日本的な悪童性の特徴だともいえます。

悪童になる以前の幼児期、もっと小さい一歳未満のとき、そして母親の胎内にいるときに、潜在的には母親のもっている豊富な性の物語を、内面的にはぜんぶ受け継いでいますから、幼児期になるとそれが解放されて、そのままであれば何でもすごい悪童になるし、性的な意味でもたいへんな悪童で悪いことばかりするようになります。

しかし五歳とか六歳の学童期になると、家と学校で規律を植えつけられて、母親から受けとった奔放な性的な体験とか心理状態はぜんぶ意識下におしこめられ、まっとうな子供らしさあるいは学童らしさみたいなものを獲得するのがふつうです。悪童はその時期になっても胎児期以降、幼児期までに受けとったものを規律の下に抑制できないで出てきてしまう。それが『坊っちゃん』のもっている悪童性です。

「坊っちゃん」に母親を想定すると、盲目的だけどもたいへん愛情をもって子供を育て、一生懸命かわいがって、おっぱいをやっているイメージが浮かんできます。しかし、漱石にそういう母親がいたかという点、それは違います。『坊っちゃん』のなかに清という老女が出てきます。漱石が描いたなかではこの人が盲目的な愛情をもって、少し見当外れだけれども心からの愛情で専一するというイメージで、「坊っちゃん」がいたずらをしてもらっています。

漱石のほんとうの母親は和歌のひとつも詠むような、当時でいえばわりに知的な母親です。漱石も、漱石の奥方である夏目鏡子の『漱石の思い出』も、長女のだんなである松岡譲でも、漱石は父親にたいしてはあまりもたなかった愛慕と尊敬を母親にはもっていたといっています。

③□者□様のかたちでそういうレグデというか神話をつくりあげていますが、僕はそうおもいません。

漱石は母親が年をとってから生まれた末っ子です。歳とって子供を生むのは恥ずかしいというか、みつともない「耻かきつ子」というのが、当時の世間的な考え方です。B、そういう習慣があつて、すぐに里子にやられてしまします。一説によれば、縁日で夜店を開いている道具屋のむしろのところに籠に入れて置かれていた。異母姉が通るかかってそれを見て、かわいそうだとか家に連れてきますが、なんで連れてきたといわれて、また帰されてしまつたりします。里子が終わると今度は養子にやられて、養父母に育てられます。そのとき欲求不満もあつて、めちやくちやに乱暴な時代を過ごします。たとえば自分の要求が通らないと要求が通るまで地べたに寝転がって泣きわめく。養父は夏目家の書生をしていた人なので、ちやほやして要求を通してやるという時代を過ごします。そして女性問題で養父母の夫婦げんかが激しくなつて、いられなくなつて実家へ帰される。しかし、養父母の姓のまま、夏目という姓にかえたのは二十歳すぎだった、そういう体験も経ています。

漱石自体も母親を敬慕していると書いていますし、漱石の奥さんも『漱石の思い出』のなかでそういつている。松岡譲もそう書いていますが、僕はそうおもいません。④潜在的には、敬慕すべき母親だとはおもつていなかったとおもいます。

『坊っちゃん』のなかには、じぶんはいたずら者で、学校で二階の窓から首を出していて、おまえ、そこから飛び降りてみる、降りられないだろうなんていわれると、飛び降りられるさといってほんとうにやって腰骨を打ってしまうとか、西洋ナイフを見せびらかしていて、そんなものは光っているだけで切れないんだろーうといわれると、そんなばかなことがあるかといってじぶんの親指の甲のところを切ってしまうとか、その手のCなことがたくさん描写されています。それは漱石自体の体験でいえば、養子にやられて、そこで育てられていたときのじぶんの姿を反映しているとおもいます。学童期というか、学校へ行くような年齢になってからはたぶんそういうことはあまりしていないので、それ以前のじぶんのふるまいをそこに投入しているのだとおもいます。

漱石は『硝子戸の中』で、じぶんの母親は敬愛すべき母親だったというエピソードを書いていて、それがほんとうに敬愛すべき母親だったという材料に使われていますが、僕はそうおもいません。

こういうエピソードかというと、養家からうちへ帰らせられて、じぶんの父親、母親をお祖父さん、お祖母さんと呼ばされているのです。そのころ変な夢をたびたび見るのですが、ある時、じぶんが子供ではとても背負いきれないほどたくさんのお金を借金をして、返せなくて、どうしようもなくなっているという夢を見ます。目が覚めたか覚めなにかじぶんでもわからない、夢の中だったか外だったかわからないと書いていますが、うなされて、下にいるお母さん呼びます。半分寝ぼけて、じぶんはたくさんのお金を使いこんでしまっただろうしもうもないんだと訴えると、母親が下からやってきて、いいよ、いいよ、私が払ってやるからという。それを聞いて安心してまた眠りこんだという挿話を書いて、いい母親の思ひ出としています。

D、僕はそれは違うのではないかとおもいます。つまり、幼児なのに背負いきれないほどの借金をおつて、それが罪の意識になつてうなされるような夢を見るといふことのほうが重要です。僕にはいい母親、いい父親ではなかったことの証拠だとおもえます。理想の母親像をじぶんでも書き、近親も書くというかたちで通説になつていようには、漱石の心のなかをただせば、おもっていないかただろうとおもいます。

それでは理想の母親像になるかというと、清という落ちぶれた武家の未亡人です。たとえば、『坊っちゃん』は父親が兄貴ばかりをえこひいきしていてもしょうくないとおもっている。兄貴と将棋をさして、持ち駒をしてひきようだと将棋の駒をほうつたら兄貴に当たって血が出てしまった。父親からどやされて、おまえは勘当だといわれてしまう。そうすると、清がどうか勘弁してやってくれといひいて、涙を流して父親にわびを入れて、やっと許される。そういう挿話が『坊っちゃん』のなかにあります。たぶんこの清が、漱石の描いていた理想の母親像です。『坊っちゃん』の父親は、おまえは将来ろくな者にならないといつても口癖のようにいつている。母親もおまえのような乱暴者はほんとうにこれからのことが思いやられる、というと書かれています。それはたぶん漱石の父親、母親にたいする本音で、それで描いたのが清という老女だと思ひます。清は盲目的で見当外れなことばかりしますが、父親や兄貴に内緒でこちそうしてくれたり、お菓子をくれたり、小遣いをくれたり、あんなは真つ正直だからきつと偉い人になるといつてくれます。出世して家をもつたら、そのときは私を雇つて一緒に置いてください、としよつちゅう

ういつているのが清のイメージです。それがたぶん漱石の理想の母親のイメージだったとおもいます。

(吉本 隆明「夏目漱石を読む」より)

問一、——線①『坊っちゃん』という作品は日本の悪童物語のひとつの典型です」とありますが、ここでの「悪童」とはどのようなものですか。文章中から五十三字で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問二、——線②「それ」が指し示しているものを~~~~線a s eからすべて選び、記号で答えなさい。

問三、

A

・

B

・

D

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、しかし イ、つまり ウ、たとえば エ、すると オ、だから

問四、——線③「□者□様」の空欄に共通してあてはまる言葉を漢字一字で答え、四字熟語を完成させなさい。

問五、

C

には小説『坊っちゃん』の冒頭に出てくる言葉が入ります。あてはまるものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、無礼講 イ、無頓着 ウ、無邪気 エ、無鉄砲

問 六、――線④「潜在的には、敬慕すべき母親だとはおもっていなかったとおもいます」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、幼児にもかかわらず、実の両親が漱石に返済しきれないほどの借金を背負わせていたと考えているから。
イ、無意識レベルで不安を感じるなど、漱石が両親のことを心から信頼できる環境ではなかったと考えているから。
ウ、悪い夢を見て罪の意識を感じさせられるほど、漱石は両親からの虐待に追い詰められていたと考えているから。
エ、実の両親なのに「お父さん」「お母さん」と呼ばせてくれないことを、本当は漱石が憤慨していたと考えているから。

問 七、――線⑤「それ以前のじぶんのふるまいをそこに投入している」とありますが、ここでの具体的な「ふるまい」を文章中から一文で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問 八、――線⑥「たぶんこの清が、漱石の描いていた理想の母親像です」とありますが、「理想の母親像」とはどのようなものですか。文章中から二十五字で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問 九、文章の内容に合っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、『坊っちゃん』に代表されるような日本的な悪童性は、実際は世界中の悪童たちに共通して見られるものである。
イ、普通の子どもたちが規律を守れなくなると、『坊っちゃん』に登場するような悪童になってしまう。
ウ、漱石にとって実の母親が理想的な母親ではなかったことは、『坊っちゃん』に登場する母親の言動からも読みとれる。
エ、『坊っちゃん』の中で「坊っちゃん」は世話係の清に理想的な母親のイメージを重ね、清のことを慕っている。

問題は次ページに続きます。

四

次の資料は、ある中学校の文化祭に関する資料です。これを見て、あとの問いに答えなさい。

資料A 学校全体の文化祭テーマ

『広げよう自分の世界、つなげよう心と心』

説明：自分の知識や考えを広げると共に、人と人との絆を深める。

資料B クラス出し物の条件(以下の①と②の条件をそれぞれ満たすこと)

- ①「知識や考えを広げる」ことを意識し、何らかの教科に関係のある内容であること。
②「人と人との絆を深める」ことを意識し、クラス全員に発表や参加の機会があること。

資料C 話し合いの中で出されたクラス出し物の希望一覧

	タイトル	内容の説明
①	夏目漱石展	文豪夏目漱石の作品と生涯について全員で展示発表します。
②	宇宙船を再現	宇宙船模型の中から宇宙のDVD映像を鑑賞します。
③	おもしろ理科実験	中学生にもできる実験ショー。時間交代制で全員が実験をします。
④	日本語禁止カフェ	メニューも応対も英語だけの喫茶店です。時間交代制で店員になります。
⑤	迷えるお化け屋敷	参加者がお化けのメイクをして迷路に挑戦します。
⑥	ハロウィン喫茶	店員がハロウィンの仮装をしている喫茶店。時間交代制で全員仮装。
⑦	お笑いライブ	クラスのひょうきん者二人によるお笑いライブです。
⑧	模擬裁判員裁判	裁判員裁判を疑似体験します。

資料D クラスの話し合いの様子

議長：意見が多数出たので、出し物を何にするか多数決を採ります。手を挙げてください。
生徒①：議長！ 一人何回まで手を挙げていいんですか？
議長：えっと、一人1回です。
生徒②：え～困ったなあ。一人2回じゃダメですか。(大勢が賛同の意を示す)
議長：しょうがないなあ。わかりました。一人2回までとします。
生徒③：ちょっと待って。まだ多数決をするべきではないと思います。
議長：ちょっと、そういう意見は困るなあ。議事進行が台無しになるじゃないか。決を採ります。
生徒③：いや待ってよ。まだ多数決をとるには早すぎるよ。
議長：どこが早い？ もう十分希望は出たじゃないか。
生徒③：…でも、決をとる前にきちんと話し合わないか…。
生徒①：もう話し合いの必要なんてないよ。出し物の希望がこれだけでてるんだから。
生徒②：そうだよ。あとはどれにするか決めるだけじゃん。多数決が即決で一番公平だしね。
議長：じゃあ、いいですね。多数決をとります！
生徒③：う～ん。でも…テーマのこととか、きちんと話し合わなくてよかったのかなあ。

資料E 多数決の結果(クラス人数38名・一人2回挙手)

①	夏目漱石展	4票	⑤	迷えるお化け屋敷	9票
②	宇宙船を再現	7票	⑥	ハロウィン喫茶	16票
③	おもしろ理科実験	8票	⑦	お笑いライブ	18票
④	日本語禁止カフェ	11票	⑧	模擬裁判員裁判	3票

問

一、資料A～Cから読み取れることとして適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア、資料AとBを見ると、各クラスの出し物の内容は学校全体のテーマに沿って決めるものであることがわかる。
イ、資料Bの①の条件を見ると、クラス出し物として喫茶店を選ぶのはふさわしくないと考えることがわかる。
ウ、資料Bの②の条件を見ると、クラス出し物として展示発表を選ぶのはふさわしくないと考えることがわかる。
エ、資料Cの説明を見ると、クラス出し物としての条件を満たしているか不明なものもあることがわかる。

問

二、資料Dで生徒③が問題にしていることはどのようなことだと読み取れますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、多数決では正しい結論が導き出せるとは限らないので、採決の前に候補が適切かを十分に検討するべきだということ。
イ、多数決では人の意見に流されてしまいがちなので、意見が変わらないように採決の前によく考えるべきだということ。
ウ、時間をかけて話し合えば、他にもよいアイデアが出るかもしれないので、すぐに結論を出すのは良くないということ。
エ、候補を一度に二つ選ぶよりも一つに絞る方がよいので、じっくり考えるためにもっと時間をかけるべきだということ。

問

三、資料Eから読み取れることとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、出し物の案が出された後、すぐに多数決を採ったことについては、特に問題がなかったと言える。
イ、①や⑧の案に対する希望が少なかったのは、文化祭のテーマに沿っていなかったからである。
ウ、多数決による採決では、挙手は一人一回までにしないと、正しい結果にはならないと言える。
エ、⑦は得票数が最も多いが、同時に過半数以上が選んでいないため、クラスの総意とは言い難い。

問 四、資料Eをグラフにするならば、どのようなグラフが最も適当ですか。次から選び、記号で答えなさい。

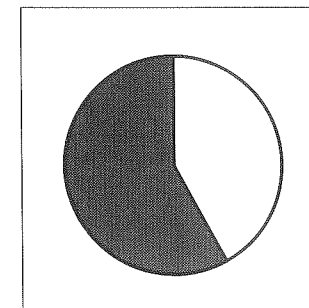
ア、円グラフ

イ、棒グラフ

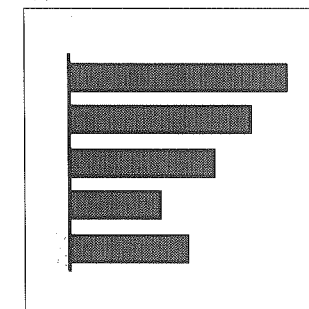
ウ、折線グラフ

エ、面グラフ

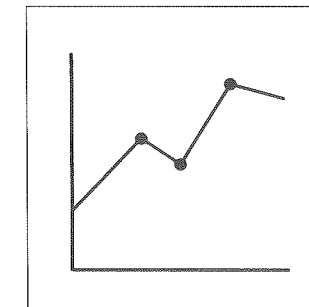
円グラフ



棒グラフ



折線グラフ



面グラフ

